勉強する場所として、学校をどうして作ったのだろうか?

HPの「『校長らが誤答児童に合図』の報道に接して」に関連して、あるメル友からのメールに「ふと、勉強する場所としてある学校を、どうして作ったのだろうか?」との一文が目に止まり、厚かましく次のように返信した。

【 自分は、学校とは、「建物あり」のことではなく、まず「教育活動あり」という事象 のことと考えています。

「林間学校」、「臨海学校」という言葉があるように、校舎、校庭でなくても教育活動があることは容易に理解できますよね。

そこが確認されず、例えば、不登校の子どもが「校門をタッチすれば出席したことにする。」のように、係わり合う事象がないのに、「教育を受けたことにする。」というのは、 甚だしい錯覚の形骸化。

自分はついつい語彙(概念)や物事の根幹を確認したくなるのは、事柄の本質が見えて くるように思うから。

そうでないと、たくさんある枝葉がそれそれが主張すると混乱が生じますので、お互いの食い違いによる混乱の整理のためにも、まず、共有する根幹を確認したい訳です。

その根幹から互いの枝葉をどう伸ばしているか、どう伸ばすかを話し合えば、食い違い の解決の糸口も見つかるのでないかと思っています。

人それぞれの属性(性別、立場、障害のある、なし、等々)がどうであろうが、共有する根幹は、「生命がある、生きている」であり、生きようとする周りの生命と共に「生きていく」ことであり、まずそこから見つめるとそれぞれの枝葉がどう見えるか、どう考えて行けばいいのかに気づけるのでないかと思っています。

その共有する根幹を互いに確認の上で、枝葉はそれぞれの特色で伸びればいいのであり、 それが個性(自己表現、自己実現、等)というものではないでしょうか。

ですから、その一助の教育活動であって欲しいし、学校はその一つの空間であるだけに、 錯覚はして欲しくないと思っています。

参考までに、あるメル友が教えてくれたことのメモを紹介します。

「schoolの語源のラテン語のschola、ギリシャ語のscholeは、本来は「閑暇」の意味。

貴族階級の生活の中だけでは文化を伝承できないと考え作られたもの。

学校で教えることは、知識の詰め込みではなく、人類の文化の継承という側面があるということ。」

「文化」の概念は、広辞苑ででも確認してくださいね。 】